

保育現場での身体表現に活かす運動分析に関する一考察
—ケステンバーグムーブメントプロフィールにおけるテンションフロー特性に着目して—

崎 山 ゆかり
(武庫川女子大学教育学部教育学科)

A Study of Movement Analysis for Application in Physical Expression
in Early Childhood Care and Education

—Focusing on Tension Flow Attributes in the Kestenberg Movement Profile—

Yukari SAKIYAMA

*Department of Education, School of Education
Mukogawa Women's University*

Abstract

Instructing physical expression in early childhood education and care does not mean teaching fully choreographed dances. Rather, teachers should provide children with various opportunities to experience various joyful movements. However, this is challenging for the majority of teachers who do not understand the theoretical structure of movement. Knowledge of movement analysis may support them and offer a solution.

The Kestenberg Movement Profile (KMP) is a complex tool for analyzing human movement, especially useful for babies and infants, from a psychodynamic and developmental point of view.

The author, a KMP Certified Analyst has been attempting to apply it in various fields such as Dance/Movement Therapy and physical education for small children.

This study focused on Tension Flow Attributes across 9 KMP categories in order to explore the possibility of increasing movement variations for physical expression. It is theoretically based on Laban Movement Analysis (LMA), and consists of the following 6 factors: Flow Adjustment, Even Flow, Low Intensity, High Intensity, Gradualilty, Abruptness, which can be applied to change Effort quality in LMA to enrich physical expression. Concrete examples of animal movements such as elephants and frogs were described to clarify how the elements of KMP may be used for expanding the variations of movement when instructing children.

The KMP approach is always used to analyze the relationship between one person and another, or between a person and an object, and can be applied to interactive relationships through body movements. In future research, KMP should be explored for further applications such as early stage developmental disorder detection through IT support.

1. はじめに

これまで筆者は、保育者養成課程における幼児体育や身体表現などの科目を担当し、運動の得手不得手にかかわらず、保育現場で動きを通した楽しい遊びの重要性に力点を置き指導を行ってきた。特に、採用試験の身体表現やリズムダンスなどの実技試験の対策の相談を受ける際、学生たちはより具体的な助言を求めている。しかしながら、身体表現やリズムダンスなどの表現系の要素が含まれる分野では、一夜漬けで振り付けを覚えるような動きの暗記は意味をなさない。

古市ら¹⁾は、保育における表現技術の基本的な視点として、「双方向こそが身体表現力を育てる」と明言し、多様な身体表現あそびを例示している。さらに、古市を中心として結成された「新リズム表現研究会」では、こどもの身近にあるものや楽しい楽曲を取り上げ、現場の保育者向けに具体的な作品を紹介²⁾している。そこに紹介された現場の保育者たちの困りごとの中には、「子どもの表現をひき出す言葉がけに迷います」、「自分に発想力や想像力がなく、幅広い表現方法を思いつきません」などの声³⁾が挙げられている。このことから、こどもの豊かな身体表現を引き出すために、保育者たちが現場で苦心する姿がうかがえる。

また表現的な活動は、保育現場に限らず教育の現場でも活かされており、特別支援教育の分野において、ムーブメント教育における表現的なダンスムーブメントに着目する指導者もいる。大橋⁴⁾は、その著書の中で様々な基本的ワークに Laban の運動分析⁵⁾を踏まえた動きの質をアレンジする具体的な方法を示しながら、個としての動きの幅の広がりを見せている。こうした運動分析の視点は、これまで舞踊学の分野で身体表現の基本理論のひとつとして学ばれており、幼児教育や保育における身体表現の指導の中で、積極的に取り上げられることはなかった。しかし大橋が示すように、現場での実際の指導において運動分析的な視点をもつことは、専門的ダンス教育を基盤としなくても、保育現場での身体表現指導にも応用が可能であることが示唆される。

筆者の動きの指導における理論的基盤をなすケステンバークムーブメントプロフィール (KMP)⁶⁾は、児童精神分析医のケステンバークらによって開発された精神力動的な発達段階を枠組とした動きの分析法である。KMP は、観察対象者のビデオ映像を元に、対象者の対人および対物の場面に着目して、その動きによるかかわり方を9つの分析カテゴリーからのべ120種^{註1)}の動きや動きのリズムの視点から、頻出度のバランスなどを数値で示してグラフ化し解釈を行う複雑な分析ツールである。その複雑さから、認定されている KMP 指導者も少なく、技法の汎用化には多くの課題がある。

そこで本研究では、KMP の分析カテゴリーの中から、感情の核を示し個の情動の変化としてとらえられているテンションフロー特性⁷⁾に着目し、保育現場でこどもの豊かな身体表現を引き出す指導のための、KMP の応用可能性を検討することを目的とする。

2. KMP におけるテンションフロー特性

KMP は、Table 1 に示す通り、エフォートとシェイプから成る2つの系に分かれる計9つのカテゴリーから構成されている。カテゴリーごとに分析対象となる動きの要素や観察対象となる動作数が、Laban の運動分析の理論の枠組みに沿って定められている。欧米などでは、母子支援の現場⁸⁾やダンスや動きを用いた心理療法の現場⁹⁾などで主に用いられてきた。今回取り上げるテンションフロー特性は、テンションフローリズムと称される動きのリズムの性質を、記録されたリズムラインの形状の特徴ごとに分類するカテゴリーに位置づけられている。その分析方法はきわめて複雑であり、特に記譜に関する手技においては、全てのカテゴリーをまとめたダイアグラム作成に初回は60時間^{註2)}を要する。今回取り上げるテンションフロー特性の、具体的な要素の原語とそれらの要素が示す意味をまとめたものが Table 2 である。ここで用いられるフローとは、連続する動きの一連の流れの性質を意味しており、一連の動きの流れが一定か否かを示すものである。具体的には、変わらずにずっと一定の動きが続くのか、または動きが一定の方向に定まることなく常に多様な方向へと豊かに広がっていくのか、この対極的な概念から構成されている。

また、これらの6つの要素は、運動分析の理論上、対立する2極(indulging-fighting)と3つの視点(空間、重さ、時間)に分類されており、Laban の運動分析の中で運動の質を意味する4つのエフォート(Effort)¹⁰⁾の中の、空間、重さ、時間の3つが反映されている。テンションフロー特性は、実際の運動分析作業におけるテンションフローリズムのカテゴリーにおける記譜で記録されたリズムラインを、その特性ごとに分類する作業が必要であるが、構成要素が、空間、重さ、時間の視点から対立する2極の性質をとらえた6つにまとめられるシンプルさがある。これは、テンションフローのさまざまなリズムの性質を6

つの要素に分類することで、リズムの中にみられる共通した特性を浮かび上がらせている。

Table 1 Outline of KMP

系	カテゴリー	要素数	動作数	カテゴリーの解釈
I	テンションフローリズム	10	16	欲求の心的表出
	テンションフロー特性	6	12	個の情動の変化
	前駆エフォート	6	12	未成熟で防衛および学習行動の反映
	エフォート	6	12	外界の現実との不可欠な局面
II	両極性シェイプフロー	6	12	快と不快を示唆
	単極性シェイプフロー	10	20	接近と回避のパターンを示唆
	シェイプフローデザイン	6	12	個の関係性と関係するものへの感情の形式
	方向性シェイプ	6	12	対象が位置づけられ、環境と相互的刺激に対する防御
	面性シェイプ	6	12	対象やその内的イメージへの態度

Table 2 Factor of Tension Flow Attributes in KMP

原語	意味	運動分析上の視点
Flow Adjustment	調整可能なフロー	空間の使い方
Even Flow	一定で変わらないフロー	
Low Intensity	動きが弱々しい	重さの使い方
High Intensity	動きが力強い	
Graduality	緩やかな動き	時間の使い方
Abruptness	突発的な動き	

海外では、このようなテンションフロー特性の要因のみに着目して、そのシンプルな視点から、保育現場でのこどもとのかかわりに応用しようとした実践研究¹¹⁾が存在するが、日本においてはまだ保育現場での KMP 活用には至っていない。

3. 身体表現を引きだす言葉かけの基盤となる運動分析のとらえ方

Laban の運動分析の Effort 理論を基盤としている KMP のテンションフロー特性について、Table2 で示した運動分析上の 3 つの視点を用い、以下に具体的な動きを述べていく。

空間の使い方では、空間の中でどのように動きの方向性を定めていくが問われている。具体的には、動き手が空間内を移動する際、その目的地が定まっている場合と、目的地が定まらずどこまでも自由に空間内を動き回る場合がある。運動分析におけるフローとは、一般的に動きの流れを意味しており、KMP において、動き手のフローが不変で一定であることは、すなわち空間内での目的地が定まっていることを意味している。フローが調整可能であるということは、フローが常に変化しており、空間内での目的地が定まらず、縦横無尽にまたは放射状に動きが広がる様を意味している。重さの使い方では、動き手の動きの様態が、羽が生えたように重力を感じることなく軽やかに動くか、鉛を抱えたようにからだが重く動きにくいかということの意味している。この重さや動きの強度の違いは、時に前者の羽が生えた軽い動きは、力が入っていない動きとみなし、弱々しい動きととらえられることもある。加えて、鉛を抱えたような重たげな動きは、力が入っている動きとみなし、たくましい力強い動きととらえられるのである。時間の使い方では、動きの速度が速いか遅いかという、スピードに関するとらえ方だけでなく、むしろひとつの動きを行う時間の幅を凝縮して突発的に行うか、わざと時間を引き延ばすようにしてゆっくり動くかという、動き手の時間の使い方のとらえ方となっている。

Laban の運動分析は、個の動きの在り方、空間との関係性などを中心に理論が成り立っている。一方、KMP における観察の視点は対人および対物への動きであり、個がどのように他者とかがわって動くか、

またはどのように周りのモノとかかわって動くのかという、そのアプローチにおける動きに着目する。これを、Table2の運動分析上の視点に当てはめると、次のようなとらえ方が可能となる。

空間の使い方では、かかわりたい(またはかかわりたくない)人物やモノが明らかかどうか、その対象に向かう(または向かわない)時の感情も含め、その対象への方向性としてとらえることができる。動きの強度では、何かを持ってまたは誰かを意識して、軽やかに動くか、ずっしりと重々しく動くかなど、対人および対物とのかかわりの中で、どのような感情を乗せていくのかをとらえることができる。さらに、時間の使い方では、誰かに何かを渡す時、なかなか渡さずじらして時間をかけるか、すぐにさっと渡すかなど、具体的なかかわりの動きの要素として認識することが可能である。

つまり、KMPにおいては、対人および対物が前提となる動きを対象とするため、そもそもかかわりの中で被観察者が動くことになっている。このことは、前述の古市らが指摘する、表現活動における双方向でのかかわりと同じ視点であり、双方向という前提条件が一致する。つまり、動きの中で対象となる事物や人物に対し、どのようにかかわるのかという具体的な動きにつながる感情が、KMPのテンションフロー特性というカテゴリーで読み取ることが可能なのである。

拙稿¹²⁾において、テンションフロー特性を用いた動きを例示した際、「鉛筆を隣の人に手渡しする」という課題動作を用いたことがある(Figure1)。悪ふざけをしてなかなか相手に鉛筆を渡さないでおこうとするなら、その動きはフローが定まらず(Flow Adjustment)、相手をじらす(Graduality)ような動きになり、義務的にただ単に感情を込めず(Low Intensity)作業として鉛筆を渡すだけなら、フローは一定(Even Flow)で、時間をかけずにすぐに(Abruptness)渡し終えることとなる。さらに、その鉛筆が動き手にとって隣人にとっても、とても貴重なかけがえのないものなら、鉛筆を丁寧に扱い丁寧に相手に渡そうとするため、重々しく(High Intensity)時間をかけた(Graduality)動きで手渡すことになる。対象がそこに存在するという前提で考える運動分析の視点は、単に身体運動的な視点ではなく、どのような思いで他者や事物とかかわろうとするのかという、双方向を重要視した関係性における身体表現となるのである。「大切なモノを好きな相手に渡す」場合、丁寧に取り扱い優しく相手に手渡すことになるため、一定のフロー(Even Flow)で急ぐことなくゆっくり(Graduality)と手渡すが、緊張していれば力も入り(High Intensity)、気楽な関係性なら力むこともない(Low Intensity)。このようにテンションフロー特性の視点から、身体に現れる多様な表現性を読み取ることができるとなる。

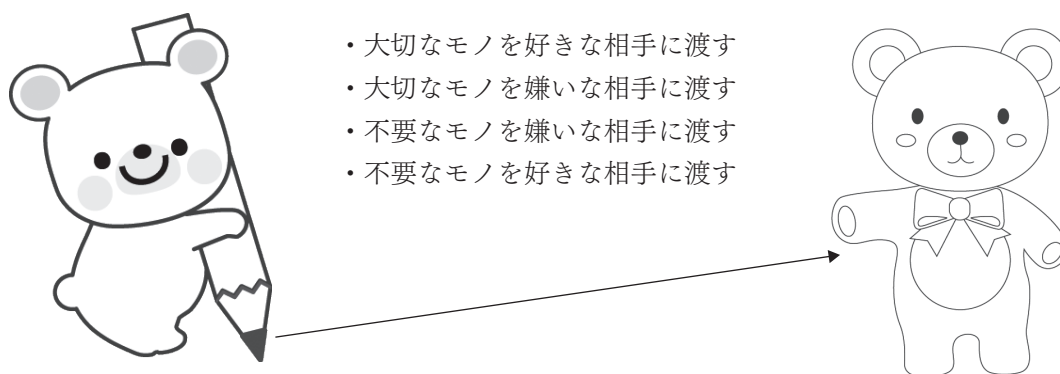


Figure 1 Example of situations in passing a pencil to the next by using Tension Flow Attributes

4. 動物を例とした動きの多様性をひき出す KMP の使い方

次に、前述してきた運動分析の視点を、具体的な保育の身体表現に活かすために、保育表現で多用される動物を例にして、動きの多様性について考えていきたい。具体的には、前述の「新リズム表現研究会」の作品集で取り上げられているゾウとカエルを対象^{註3)}として検討を進めていく。

まず、これらの動物の特徴と定番とされる動きとイメージ、それを象徴するオノマトペなどを次の

Table3 にまとめた。

Table 3 Examples of typical animals' images and their concrete physical expressions

動物	ゾウ	カエル
大きさのイメージ	巨大	掌サイズ
特徴的な動きのイメージ	ゆっくりした歩み	機敏なジャンプ
動きの特性を表すオノマトペ	のっしのっし	ぴよんぴよん
鳴き声の代表的オノマトペ	パオーン	ケロケロ
イメージを表す表現動作例	一歩一歩踏みしめながらどっしり歩く、片腕をからだの前で揺らし鼻を動かす、耳の位置に両手を広げ、パタパタ動かし耳を表す	しゃがんで両手を前につきジャンプで前進

Table3 にまとめたゾウとカエルの例は、一般的なイメージと動きの例であり、身体表現領域では定番の表現例である。保育現場では、取り上げる動物の特徴的な動きやそのイメージに焦点を当て、こどもたちの「豊かな身体表現」を目指している。この基本的姿勢は、保育領域における身体表現活動の根本であり、共通するイメージを活用することによる動きの送り手と受け手の共通理解のおかげで、「双方向」の表現活動が可能となる。

この共通のイメージを超えて、表現のバリエーションを豊かにするためには、典型的なイメージに加え、その動物がさまざまな状況下に置かれたことを意識することが重要である。問題は、この点を多くの保育者が理解しているものの、具体的にどんな「典型的でないイメージ」を思いつくかということにある。保育者や指導者たちの悩みは、まさにここにある。この解決策のひとつは、運動分析の視点を全ての条件設定に盛り込むことである。多様な状況が無理やりイメージするのではなく、予め定められた動きの全てのバリエーションで動く、ということを行うのである。そしてその動物がその動きを行う状況を後付けとして考えることで、具体的な動きのイメージを広げることが可能となる。加えて、ひとつの動きの要素だけではなく、要素同士を組み合わせさせた新たな動きのバリエーションで、さらに豊かな動きが可能となる。

このような発想で、Table3 で例に挙げたゾウとカエルの動きのバリエーションをさらに広げる例を、前述の KMP におけるテンションフロー特性の視点を加え、次の Table4 に示す。こうして典型的イメージを広げる例をひとつ知ることによって、経験豊かな保育者たちは、容易に多様な場面設定が可能となっていくと思われる。

こうした運動分析の要素を理解し、その活用法を知るだけで、前述した保育者の言葉「子どもの表現をひき出す言葉がけに迷います」という悩みに対応することができよう。また、取り上げた動物を擬人化し、宇宙や深海など非日常の時空を超えた設定で、魔法使いになったように動物たちと遊ぶという場面設定を行うことで、さらに展開が広がると思われる。「自分に発想力や想像力がなく、幅広い表現方法を思いつきません」という悩みに対しても、こうした運動分析の基本的な視点(空間の使い方、動きの強度、時間の使い方)を知りそれを組み合わせることで、構造化された幅広い表現方法を実現していけるのである。

Table 4 Examples of variations of physical expressions by Tension Flow Attributes in KMP

KMPのテンションフロー特性における動きの要素	KMPから見た動きの特性	ゾウの動き	カエルの動き
Flow Adjustment	空間移動の際、目標が定まらない状態であらゆる方向に動く	ゆったりした歩みのまま空間内をいろんな方向に動き回り、散歩を楽しむ	機敏なジャンプを維持したまま、前方だけではなく、前後左右、縦横無尽に跳びまわる
Even Flow	空間移動の際、目標を1点に絞り、その目標を目指して迷うことなく直進する	ゆっくり直進する、獲物を狙うかのように目標に向かってずんずん進む	機敏にひたすらジャンプで前進する、エサとなる虫を見つけて獲物に近づく
Low Intensity	リラックスして脱力していたり、エネルギーが不足しているようなエネルギー消費を控えるように動く	リラックスしているゾウをイメージして静かに動く、親に叱られしょんぼりする小象のように動く	軽やかに重力を無視するかのように動く、空腹で元気なく小さく動く
High Intensity	感情が大きく動きダイナミックに動いたり、エネルギーに満ち溢れるように動く	はしゃいでいる小象をイメージして元気に動く、嬉しくてたまらず興奮した様子で動く	喜びを爆発させるかのように元気に動く、これ以上ないほどの大きな鳴き声を出してジャンプする
Graduality	動く時間をたつぷり使い、速度を緩めるだけでなく、一連の動作を意図的に引き延ばすように動く	のんびり屋のゾウをイメージしてさらにゆったり歩く、眠たい小象が徐々にうとうとする	屋敷をしているときのように、のんびりゴロゴロしているイメージで動く、暑さに疲れてばてた様子で動く
Abruptness	素早く動くだけでなく、突発的に瞬間的に、急に動き出す	敵を見つけて立ち向かったり、慌てて逃げだすようにいきなり動き出す	落ち着くことなく、誰かを驚かせるかのようにいきなり動く

テンションフロー特性の6つの要素は、運動分析の3つの視点ごとに相対する2つの概念から成立している。動きのバリエーションを広げ、より豊かな身体表現につなげる場合は、Table4で示した単一の要素による動物の動きだけではなく、視点ごとに片方の概念を選択し、それを組み合わせることが望ましい。この組み合わせは、KMP理論における同質の性質の動きの組み合わせ(matching)と異質な動きの馴染みにくい組み合わせ(mismatching)¹³⁾など、さらに多様な動きを提示することも可能となる。KMPのような運動分析も、こうした分析カテゴリーに分けて、その特性から保育現場での身体表現活動を広げる理論的基盤となり、応用の可能性は今後広がっていくものと思われる。

5. おわりに

運動分析は、この専門知識を有する者にとっては、身近に応用できるにもかかわらず、応用可能な分野では広がっていない。そもそも十分な運動分析の教育カリキュラムが日本のオリジナル版というものはなく、欧米の日本語訳はさらに難解さを増長させている。筆者自身はKMPの学びと研究を通し、もっと身近な応用例を示すことの重要性を実感している。運動分析の中でも、難しく理論的であるというKMPについては、専門家以外が無理をして全てを学ぶ必要はないと感じている。むしろ、どうすればそのエッセンスを保育現場での身体表現指導に活かしていけるのかについて、専門知識を持つ者が工夫を重ねる必要があると考える。KMPには、双方向で共に動きを創る保育の身体表現につながる、対人や対物の動きを分析対象として応用できる視点が、他の分析カテゴリーにも存在している。その複雑さ故、本稿ではひとつのカテゴリーであるテンションフロー特性に限定することになったが、応用可能性は今後広がっていくことが示唆された。関係性に着目する運動分析という点では、KMPは今後身体表現指導のみならず、双方向が基盤であるコミュニケーションが困難な子どもたちにとっても、具体的な

動きを用いた保育現場での発達支援の理論的根拠となり得るものである。

ただ、この複雑さをどう解消し、より多くのカテゴリーを保育現場で活用していくかという点について、課題は山積している。KMPのアナログの分析手法だけでは限界があり、ITサポートを活用した記譜の自動化のための入力装置の検討¹⁴⁾など、分析のためのプログラミングを含め必要となっている。さらに教材そのものの検討だけではなく、その教材を取り入れた学びのカリキュラムをどのように組み立てていくのか、さらにZoomなどWeb会議システムを活用した学習プログラムを通じて遠隔地の受講生とどのように学び合うのかなどの検討も進めていきたい。そしてその先には、最も困難であるKMPの記譜そのものを理解しその技法を会得し、動きのラベル化や数値の処理など、観察された動きをデータ化し、発達支援の臨床応用に向けたKMPカリキュラムの検討が必要である。

註

- 註1) 120種は、Table1で示した9つのカテゴリーの全ての動作数を足したものである。動作数は、各カテゴリーにおけるひとつの要素に対し、Labanの理論に基づく2つの動きのパターン(Iのエフォート系ではfree-bound、IIのシェイプ系ではgrowing-shrinking)から成りたっている。そのため、動作数は要素数の2倍の数となる。但し、KMPにおいてLabanの理論の枠組みとは異なるテンションフローリズムのカテゴリーにおいては、この限りではない。
- 註2) KMPの記譜コースでは、60時間をかけてKMPのダイアグラムを作成するカリキュラムで構成されている。通常入門コース30時間を修了した者のみが参加可能であり、内容の異なる30時間のコースを2回受講しなければならない。
- 註3) 「子どもの身近にあるもの」という視点で構成されたパート1では「おおきなぞうさん」、「楽しい曲を活用」という視点で構成されたパート2では「カエルダンス」が紹介されている。

文 献

- 1) 古市久子, 保育表現技術豊かに育つ・育てる身体表現, ミネルヴァ書房, 京都, pp.21-23 (2013)
- 2) 新リズム表現研究会, 身体表現をたのしむあそび作品集, かもがわ出版, 京都, pp.6-56 (2018)
- 3) 同掲2) pp.91-92.
- 4) 大橋さつき, 特別支援教育・体育に活かすダンスムーブメント「共創力」を育み合うムーブメント教育の理論と実際, 明治図書, 東京, pp.41-54 (2008)
- 5) Moore, C., *Introduction to Laban Movement Analysis and Harmonic Theory*, textbook of Columbia College of Chicago, pp.59-132 (2010)
- 6) Hastie, S., The Kestenberg Movement Profile, S.L.Brooke ed. *Creative Arts Therapies Manual, A Guide to the History, Theoretical Approaches, Assessment, and Work with Special Populations of Art, Play, Dance, Music, Drama, and Poetry Therapies*, Charles C Tomas Publisher, LTD, Illinois, pp.121-132 (2006)
- 7) Kestenberg-Amighi, J., Loman, S., and Sossin, M. with invited contributors, *The Meaning of Movement Embodied Developmental, Clinical, and Cultural Perspectives of the Kestenberg Movement Profile*, Routledge, New York, pp.73-90 (2018)
- 8) Sossin, K.M and Birklein, S., Nonverbal Transmission of Stress Between Parent and Young Children Considerations and Psychotherapeutic Implications of a Study of Affective Movement Patterns, *Journal of Infant, Child, and Adolescent Psychotherapy*, 5 (1), pp.46-69 (2006)
- 9) Loman, S. and Merman, H., The KMP: A Tool for Dance/Movement Therapy, *American Journal of Dance Therapy*, 18 (1), pp.29-52 (1996)
- 10) Laban, R. and Lawrence, F.C., *Effort*, Macdonald & Evans, London, pp.7-17 (1965)
- 11) O'Connell, A. C., Teacher Attunement to Kestenberg Movement Profile Tension Flow Attributes in Preschool Transition

(崎山)

Planning, Master thesis in Dance/Movement Therapy & Counseling Theses. Paper16, Columbia College Chicago, pp.1-70 (2010)

12) 崎山ゆかり, ケステンバーグムーブメントプロフィールにおけるテンションフロー特性とその応用に関する一考察, ダンスセラピー研究, 10 (1), pp.37-42 (2017)

13) 前掲書 7) p.149, p.208.

14) Sakiyama, Y., Takase, H., Kawanaka, H., Inoue, A., Kestenberg Movement Profile and IT support – Focusing on Input Device for Tension Flow Rhythm Lines and Kinesthetic Empathy, American Dance Therapy Association the 54th Annual Conference Poster Presentation, (2019)

付 記

本論文は、科学研究費補助金(基盤研究(C) 18K02473)『保育現場における発達支援のための運動分析技法の自動化に関する研究』の(代表 崎山ゆかり)による研究成果の一部である。

受理日 2020年11月16日